東海地方の鉄器の出現

杉　山　和　徳

要旨　弥生時代における東海地方の鉄器化の実態に迫るため、出土鉄器の集成をおこない、各器種の様相を把握した。東海地方における鉄器の出現は弥生時代中期にまで遡るが、多岐に渡る器種が一定量認められ始めるのは、弥生時代後期からとなる。愛知県豊田市の南山畑遺跡で検出された鍛冶遺構の存在や、従来「不明鉄器」とされてきたものの用途を積極的に評価することで、弥生時代終末期には、鉄板鏨切りによる小型鉄器の製作や、鉄器の再加工による転用といった簡易な鉄器製作・鉄加工は既におこなわれ始めていた可能性を考えた。

キーワード：弥生時代、東海地方、鉄器、鍛冶遺構、鉄器製作、再加工、転用

はじめに

弥生時代の変革の一つとして捉えられる石器から鉄器への利器の転換に関する研究は、日本列島規模（松井1982・下條編1998など）で、あるいは中九州（村上1992）・近畿（山田1988）・南関東（安藤1997）といった地域単位で検討がなされてきた。弥生時代の鉄器化は、単なる材質の置換に留まらず、地域間の情報や物資の伝達といった相互交流によってもたらされた結果と考えられる。東海地方（註１）は西日本と東日本の狭間、東西交流の結節点に位置し、弥生時代のヒト・モノの動きを考えるうえで、欠かすことのできない地域である。しかし、東海地方は他地域と比べ、弥生時代鉄器の出土数が少なく、石器から鉄器への転換に関する検討も十分になされてきたとは言い難い。

近年は新たな発見に伴い、東海地方における弥生時代の鉄器資料数は以前よりも着実に増加している。また、鉄器の出現のみならず、終焉を迎える石器の側の視点からも、利器の鉄器化に関する検討を加える余地は十分にある。本稿では、弥生鉄器希薄・空白地帯として不明確であった東海地方における石器から鉄器への移行の実態に迫るための基礎的な作業として、東海地方出土の弥生時代鉄器を概観するとともに、若干の検討を加える。

１　東海地方における弥生時代鉄器研究の現状

先述した通り、出土数の少なさから東海地方の弥生時代鉄器に関する研究は、資料集成や個別資料が紹介される程度で、積極的に進められているとは言い難い。

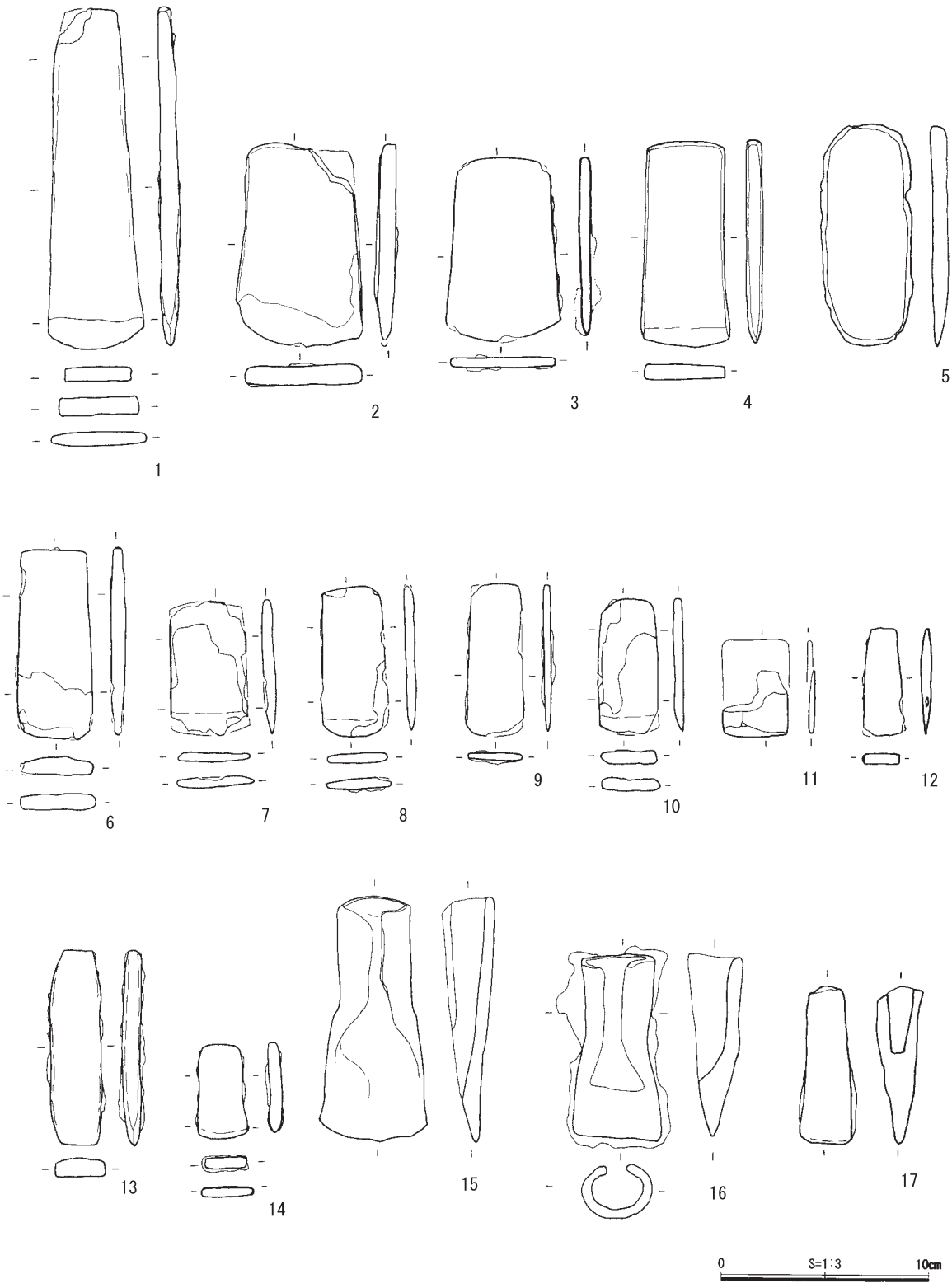
資料集成は、鉄器出土資料数が東海地方の中でも比較的多い静岡県内で、平野吾郎（平野1987）や中嶋郁夫（中嶋1992）らによっておこなわれた。また、松井一明は静岡県内出土資料の収集を中心として、東海地方における鉄器の普及を、石器の終末と関係付けながらまとめた（松井1997）。松井は弥生時代中期末から後期初頭に鉄器普及の画期を認め、石製農具の欠落から弥生時代中期段階にも、ある程度の鉄器化が進んでいた可能性を指摘している。

個別資料の紹介としては、佐藤達雄が静岡県静岡市清水区の長崎遺跡出土板状鉄斧について、類例を提示し製作技術についても言及した（佐藤1995）。長崎遺跡出土例は、村上恭通も瀬戸内海地域以東では珍しい舶載鉄製農耕具として取り上げている（村上1998など）。弥生時代鍛冶炉の東限として注目された愛知県豊田市の南山畑遺跡の鍛冶遺構では、多くの微小鉄片や鉄滓等が出土した。南山畑遺跡の鍛冶炉は、ほとんど掘り方がなく、僅かなカーボンベッドをもつⅢ類鍛冶炉に分類された（村上1998・2007）。

個々の研究の論考の中で、東海地方出土鉄器が一例として取り上げられることはあっても、東海地方の鉄器全体を取り上げた論考はほとんど認められない。近年の出土事例の増加ともあいまって、現在、東海地方ではどのような鉄器がどの程度出土しているのかも、判然としない状況と言える。そのため本稿では、集成した東海地方弥生時代鉄器出土事例を整理し、その全容を提示することによって、東

表　東海地方出土弥生鉄器地名表

実見	旧国名	遺跡名	所在地	遺構名	種別	出土点数	時期	文献
	伊豆	下河津小学校校庭遺跡	静岡県賀茂郡河津町	校庭発掘地点	剣？	1点	弥生終末期～古墳前期	梅島1978
		山木遺跡	静岡県伊豆の国市	包含層	鏃・不明2	3点	弥生後期	八幡ほか編1969
○		中島西原田遺跡	静岡県三島市	6区Ⅲ層	剣	1点	弥生？	橋本編1994
	駿河	矢崎遺跡	静岡県駿東郡清水町	Aトレンチ第3層	鉇・鏃27	28点	弥生後期	小野1971
				Fトレンチ第3層	鏃	1点	弥生後期	
				Fトレンチ層位不明	鏃	1点	弥生後期？	
○		西通北遺跡	静岡県沼津市	環濠	鉇	1点	弥生中期後半	杉山2009b・2010
		目黒身遺跡		第15号住居址	不明	1点	弥生後期末～古墳前期	小野編1970
				第17号住居址	不明	1点	弥生後期後半	
				第22号住居址	不明	1点	弥生後期末～古墳前期	
		沢田遺跡		不明	不明	1点	弥生後期	小野1957
		雌鹿塚遺跡		J-6区包含層	不明	1点	弥生後期	石川編1990
				M-12区包含層	不明	1点	弥生後期	
				M-14区包含層	釣針	1点	弥生後期	
		石川遺跡	静岡県静岡市清水区	水路跡	斧	1点	弥生後期後半	平野1987
○		長崎遺跡		6区	斧	1点	弥生後期前半	足立ほか編1995
○		川合遺跡	静岡県静岡市葵区	11区SP116232（ピット）	斧	1点	弥生後期	平野1987
○				11区柱穴状ピット	斧	1点	弥生後期	
○				11区X層	斧・鎌	2点	弥生後期	
○				11区	鉇	1点	弥生～古墳	平野・山田・伊藤編1991・1992
○				12区X層	斧5	5点	弥生後期	
○				12区	斧	1点	弥生～古墳	
		登呂遺跡	静岡県静岡市駿河区	B地区	不明2	2点	弥生後期	中野編1989
		鷹ノ道遺跡		河畔（包含層）	釧	1点	弥生後期前半	天石2000
		小黒遺跡		包含層	斧（袋状）2・鏃	3点	弥生終末期～古墳前期	浅野1988
		稲ヶ谷遺跡	静岡県藤枝市	19号住居址	斧	1点	弥生後期中葉	八木・磯部編1980
○				23号住居址	剣	1点	弥生後期後半	
○		寺家前遺跡		B610（土坑）	鎌	1点	弥生後期～古墳初頭	中川律子氏の御教示による
		田ノ谷遺跡	静岡県島田市	住居址	鉇	1点	弥生後期	渋谷・坂巻・足立編1985
		駿河山遺跡		SZ5171（方形周溝墓）周溝	鏃	1点	弥生後期	溝口彰啓氏の御教示による
				SZ2002（方形周溝墓）周溝	鉇	1点	弥生後期	
		倉見原3号墳	静岡県牧之原市	礫槨	鉇・剣2	3点	弥生終末期～古墳前期	小野ほか編1968
	遠江	原新田遺跡	静岡県掛川市	1号方形周溝墓主体部	剣	1点	弥生後期	平野1987
○		菖蒲ヶ谷遺跡		SB03（竪穴住居）	錐？	1点	弥生後期末～古墳前期	蔵本編2001
○				SB10B（竪穴住居）	鏃	1点	弥生後期末～古墳前期	
○				SB11（竪穴住居）	刀子	1点	弥生後期末～古墳前期	
○				SB14（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期末～古墳前期	
○				B区南	鑿	1点	弥生後期末～古墳前期	
		愛野向山Ⅱ遺跡	静岡県袋井市	B区SB33（竪穴住居）	鎌	1点	弥生後期	松井ほか編2004
				B区SB64（竪穴住居）	斧	1点	弥生後期	
○		竹之内原1号墓	静岡県磐田市	第1主体部	鉇・剣	2点	弥生終末期～古墳前期	木村編1992
○		新豊院山3号墓		土壙	鉇・剣・鏃2	4点	弥生終末期～古墳前期	佐口ほか編2006
○		梵天遺跡		H地点SK7（土坑）	鑿・剣	2点	弥生後期	佐口編2003
○				I地点SK7（土坑）	鎌・剣	2点	弥生後期	
		峯山遺跡	静岡県周智郡森町	台状墓第2主体部	鎌・釧	2点	弥生後期後半	伊藤1996
○		文殊堂遺跡		SF23（土坑墓）	剣	1点	弥生後期	田村編2006
○				SF70（土坑墓）	剣	1点	弥生後期	
○				C群遺構外	鏃	1点	弥生後期	
○				O群遺構外	剣	1点	弥生後期	
		平沢遺跡	静岡県浜松市天竜区	A7号住居址	鏃	1点	弥生後期	平野編1971
				A8号住居址	不明	1点	弥生後期	
				A9号住居址	不明	1点	弥生後期	
○		祝田遺跡	静岡県浜松市北区	4号方形周溝墓	刀子・摘鎌2・錐？	4点	弥生後期	鈴木編1994
○				SD54（溝状遺構）	不明3	3点	弥生後期	
○		椿野遺跡		P4002（小穴）	刀子	1点	弥生後期～古墳前期	柴田編1993
○				P4100（小穴）	刀子	1点	弥生後期～古墳前期	
○		矢畑遺跡		SZ01（方形周溝墓）	剣・鏃	2点	弥生終末期～古墳前期	丸杉・平塚・大谷編2008
		東原遺跡	静岡県浜松市浜北区	第3号住居址	鋤鍬先？	1点	弥生後期中葉	松井編1983
	三河	郷中遺跡	愛知県豊川市	C地区SK12（土坑）	斧	1点	弥生後期	前田ほか編1989
○		南山畑遺跡	愛知県豊田市	SB01（竪穴住居）	鉄片238	238点	弥生終末期	天野編1999
○				SB04（竪穴住居）	鏃・鉄片45・鉄滓6	52点	弥生終末期	
○				SB08（竪穴住居）	鉄片1087・鉄滓2	1089点	弥生終末期	
○				SB10（竪穴住居）	鏃	1点	弥生終末期	
○				SZ01（方形周溝墓）	鏃	1点	弥生終末期	
				SK03（土坑）	不明	1点	弥生終末期	
		神明遺跡		SB254（竪穴住居）	鉇	1点	弥生終末期～古墳初頭	森ほか編2001
		八剣遺跡	愛知県新城市	H区包含層	釘？	1点	弥生終末期～古墳初頭	岩野ほか編1965
		欠山遺跡	愛知県宝飯郡小坂井町	SH9（竪穴住居）	刀子・鎌	2点	弥生後期	中村編1994
	尾張	瑞穂遺跡	愛知県名古屋市瑞穂区	TC区北	釘？2	2点	弥生後期	山田1980
				包含層	鏃2	2点	弥生後期	小栗1932
		三王山遺跡	愛知県名古屋市緑区	SD02（環濠）	鏃2	2点	弥生後期	水野ほか編1999
		則武向貝塚	愛知県名古屋市西区	包含層	鉇・不明	2点	弥生後期末？	小栗1933
		朝日遺跡	愛知県名古屋市西区・清洲市	61E区SD02（溝状遺構）	刀子	1点	弥生中期中葉	宮腰編1992
				SDV（溝状遺構）	刀子	1点	弥生後期	
		二夕子遺跡	愛知県一宮市	H区住居跡	鏃3	3点	弥生後期	澄田編1967
		元屋敷遺跡		竪穴住居跡	鋤鍬先？	1点	弥生後期	
○	美濃	伊瀬粟地遺跡	岐阜県美濃加茂市	墳丘墓主体部付近	剣	1点	弥生終末期	齋藤・可児・磯谷編1994
		蘇原東山1号墳	岐阜県各務原市	周溝	刀子	1点	弥生終末期～古墳初頭	渡辺編1999
	伊勢	高松遺跡	三重県津市	台状墓主体部西側土坑	刀子	1点	弥生後期前半	谷本編1970
		大城3号墓		墳丘裾	斧（袋状）	1点	弥生後期	田中編1998
○		山奥遺跡	三重県四日市市	SH20（竪穴住居）	鑿	1点	弥生後期	清水編2003
○				SH27（竪穴住居）	刀子	1点	弥生後期	
○				SH30（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
○				SH36（竪穴住居）	鏃	1点	弥生後期	
○				SH54（竪穴住居）	鎌	1点	弥生後期	
○				SH74（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
○				SH106（竪穴住居）	斧	1点	弥生後期	清水編2004
○				SH117（竪穴住居）	鏃	1点	弥生後期	
○				SH174（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
○				SH240（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
○				SH245（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
○				SH283（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	
○				SK140（土坑）	刀子・錐？	2点	弥生後期	
		金塚遺跡		SH19（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	森川ほか編2002
				2号墳流出土	不明	1点	弥生後期	
		城ノ谷遺跡		SH20（竪穴住居）	鉇	1点	弥生後期	金子編2004
		南谷遺跡	三重県鈴鹿市	SD04（溝状遺構）	鏃2	2点	弥生後期前半	穂積・小菅編1995
		上箕田遺跡		不明	刀子	1点	弥生？	川崎ほか編2009
		下之庄東方遺跡	三重県松阪市	前山地区SX02（方形周溝墓）	斧（袋状）	1点	弥生後期	清水編2004
○	志摩	白浜遺跡	三重県鳥羽市	包含層	釣針4・剣・不明5	10点	弥生後期～古墳前期	萩本ほか編1990
○				SB2（竪穴住居）	剣	1点	弥生後期後半～古墳初頭	
	伊賀	土山遺跡	三重県名張市	土坑（竪穴住居？）	鏃	1点	弥生後期後半	清水編2004

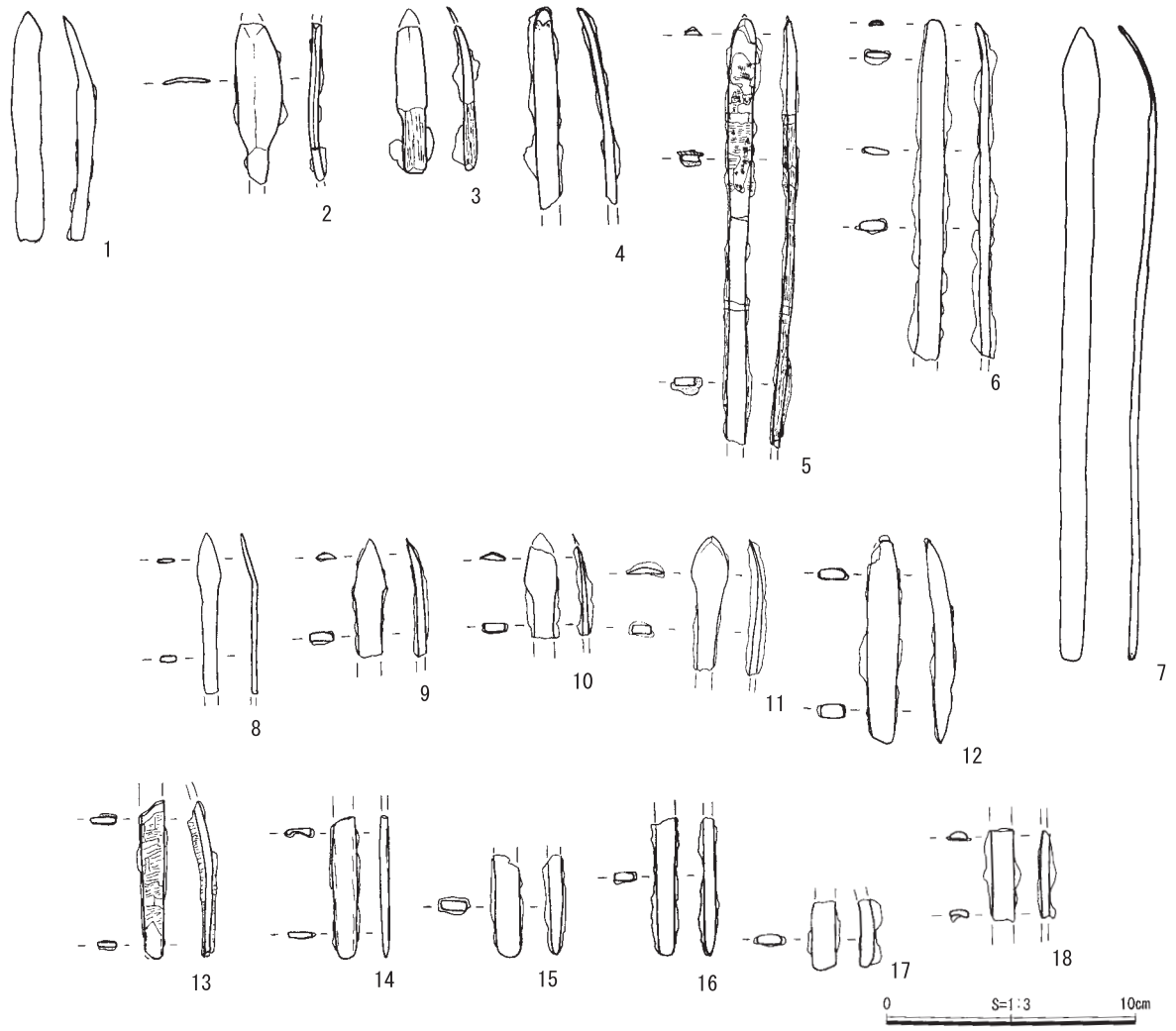


第１図　東海地方出土鉄斧の諸例
１．長崎　２・３・６～11．川合　４．郷中　５．石川　12．稲ヶ谷
13．愛野向山Ⅱ　14．山奥　15．小黒　16．大城３号　17．下之庄東方

海地方の鉄器化に関する検討を進めるための準備をおこないたい。

２　東海地方出土鉄器の集成

管見に触れる限り、東海地方の弥生時代鉄器を集成した結果、表に示した通り55遺跡より1548点が認められた（註



第２図　東海地方出土鉄鉇の諸例
１．矢崎　２．田ノ谷　３．倉見原３号　４．竹之内原１号　５．新豊院山３号　６．神明
７．則武向　８～11・15・16．山奥　12．城ノ谷　13．西通北　14．川合　17．金塚　18．菖蒲ヶ谷

２）。ただし、この中には愛知県豊田市の南山畑遺跡で検出された鍛冶関連遺構（SB01・04・08）より出土した鉄器製作時の鍛造薄片等の微小鉄片や鉄滓等1378点も含まれている。そのため、製品としての鉄器の数は、総点数からこの鍛冶関連遺物1378点を除いた170点となる。

ほぼ弥生時代後期から終末期にかけての資料であるが、弥生時代中期にまで遡り得るものが僅かながら存在する。

静岡県沼津市の西通北遺跡出土鉄鉇は弥生時代中期中葉以前に掘削されたと考えられる環濠の第３層より出土した。第３層からは弥生時代中期後葉の有東式段階の弥生土器がまとまって出土しており、鉄鉇の帰属時期も弥生時代中期後葉となる可能性が高い（杉山2010）。愛知県名古屋市西区・清洲市の朝日遺跡61E SD02出土刀子は貝田町式後半期（Ⅴ-１期）の弥生土器とともに出土しており、弥生時代中期中葉頃に帰属するものと考えられている（石黒ほか編1994）。

器種の内訳は、工具として鉄斧が19点、鉄鉇が19点、鉄鑿が３点、鉄刀子が12点、農具として鉄鎌が９点、漁撈具として鉄釣針が５点、武器として鉄剣が17点、鉄鏃が53点、装身具として鉄釧が２点出土している。

出土した鉄器は住居址などの居住域や包含層からの出土が多い。一方、墳墓や方形周溝墓といった墓域からの出土は28点に止まり、全体から見れば決して多いとは言えない。鉄剣や鉄鏃といった武器は墓域からの出土が多い傾向にある。

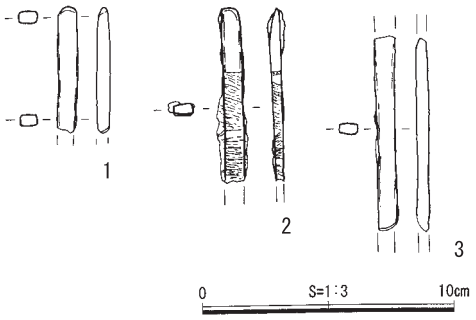
3　東海地方出土鉄器の概略

集成した鉄器は、工具・農具・漁撈具・武器・装身具と用途も性格も多岐に渡る。これらを各器種別に概観する。

①鉄斧（第１図）

１～14が板状鉄斧、15～17が袋状鉄斧である。川越哲志の分類（川越1993）では、板状鉄斧の内、１～４の４点がＡ１型にあたり、伐採用両刃の斧と考えられる。先述した通り、長崎遺跡出土例である１は、特に大型で重厚な作りから、瀬戸内海地域以東では稀有な舶載品と評価されている（村上1998など）。５～14の10点はＣ型にあたり、加工用片刃の鉇と考えられる。鉄斧の出土は散発的なことが多いのに対し、川合遺跡では斧と鉇を織り交ぜて合計９点の板状鉄斧が１遺跡から出土している。

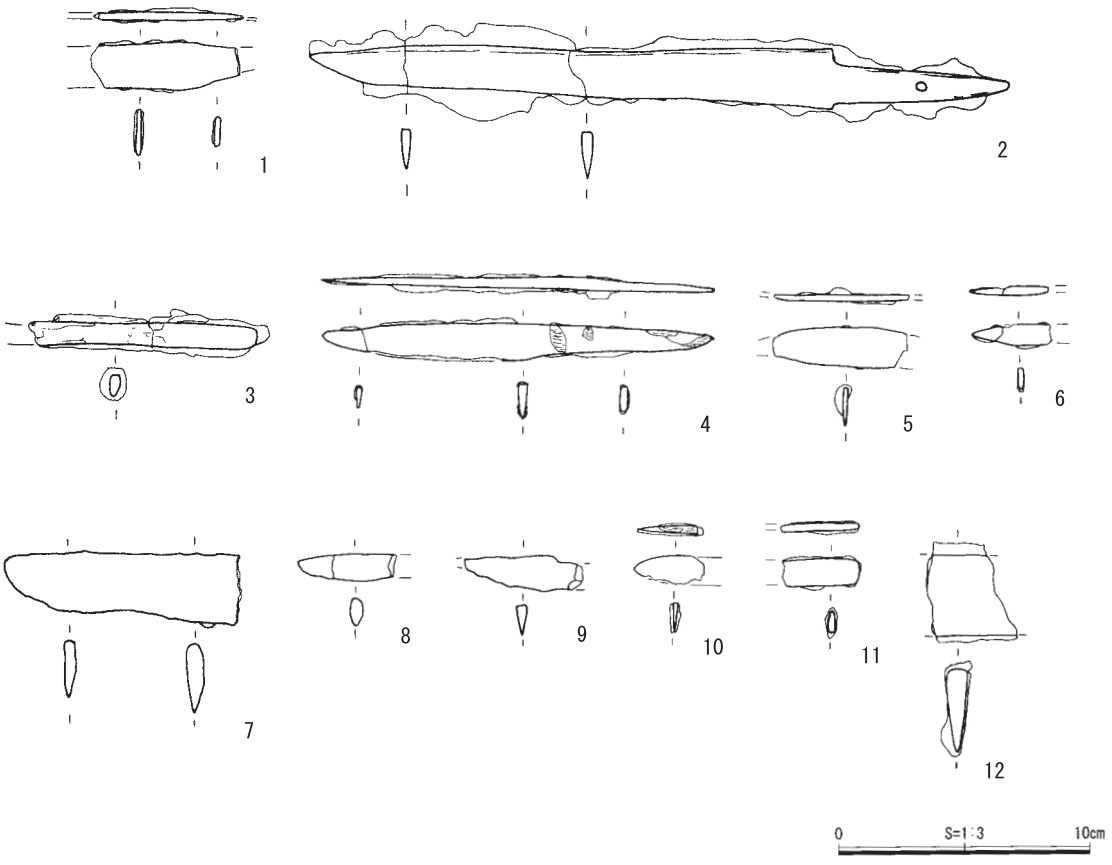
袋状鉄斧の３点は川越分類ではいずれもⅡａ型にあたるが、斧か鉇かは定かではない。弥生時代を通じて大型の袋状鉄斧は類例が少なく、斧に対して鉇が多い傾向にあるようだが、15は全長10㎝を超えており、斧としての使用にも耐え得る資料だと考えられる。



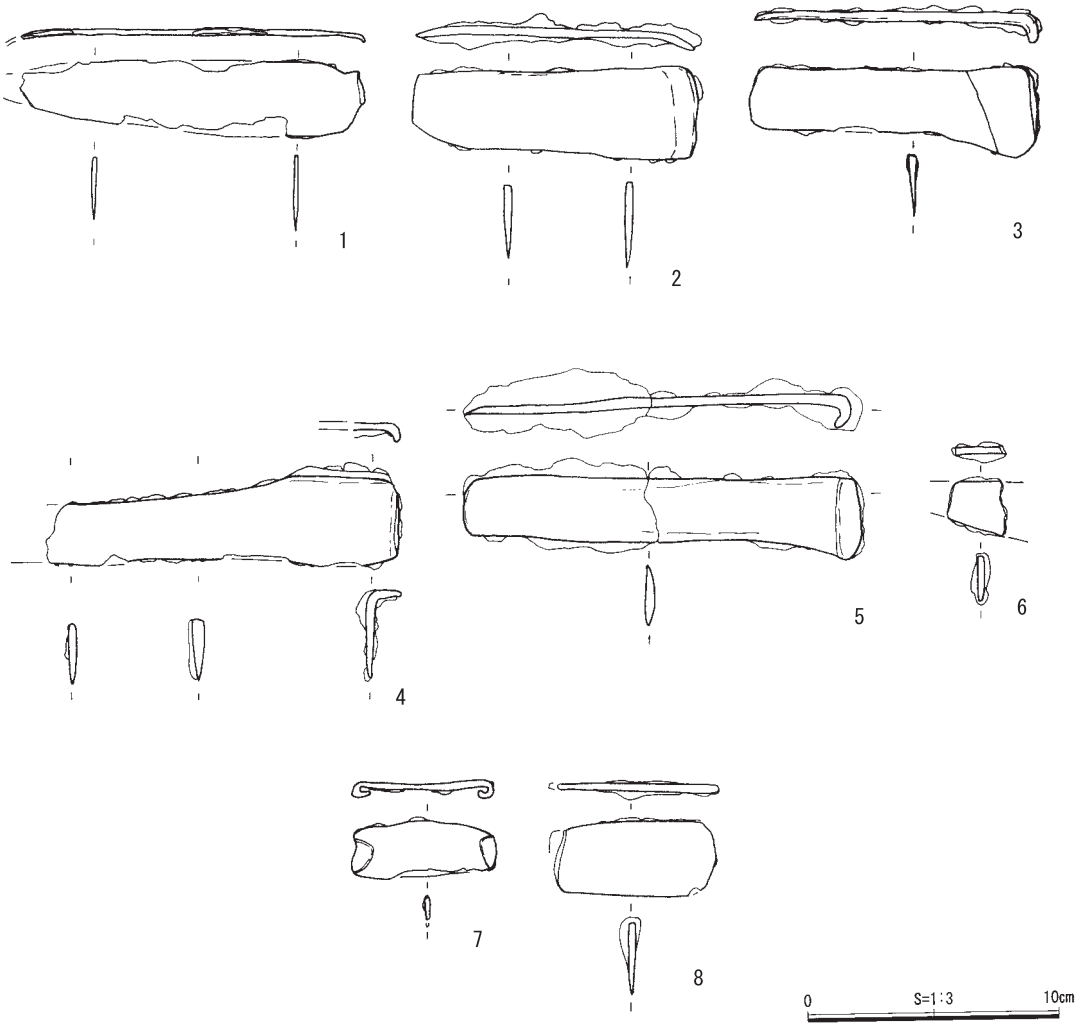
第３図　東海地方出土鉄鑿の諸例
１．菖蒲ヶ谷　２．梵天　３．山奥

②鉄鉇（第２図）

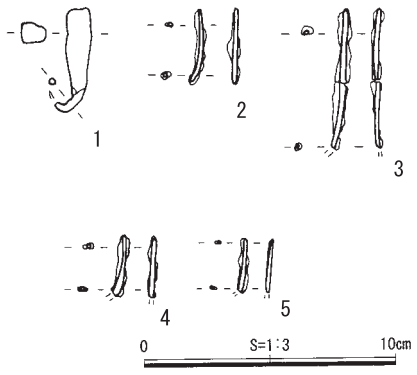
１～12が完形あるいは刃部が残存しているもの、13～17は茎部が残存しているもの、18が刃部から茎部にかけての破片である。遺存状態が悪く、分類などの検討に耐えられる資料が少ない。平面形態は２・３・５・７・８・９・10・11のように、茎部が板状で刃部が鏃状を呈する



第４図　東海地方出土鉄刀子の諸例
１・６．椿野　２．欠山　３．高松　４・10．山奥　５．祝田
７・８．朝日　９．蘇原東山１号　11．菖蒲ヶ谷　12．上箕田



第５図　東海地方出土鉄鎌の諸例
１．川合　２．愛野向山Ⅱ　３．梵天　４．峯山　５．欠山　６．山奥　７・８．祝田



第６図　東海地方出土鉄釣針の諸例
１．雌鹿塚　２～５．白浜

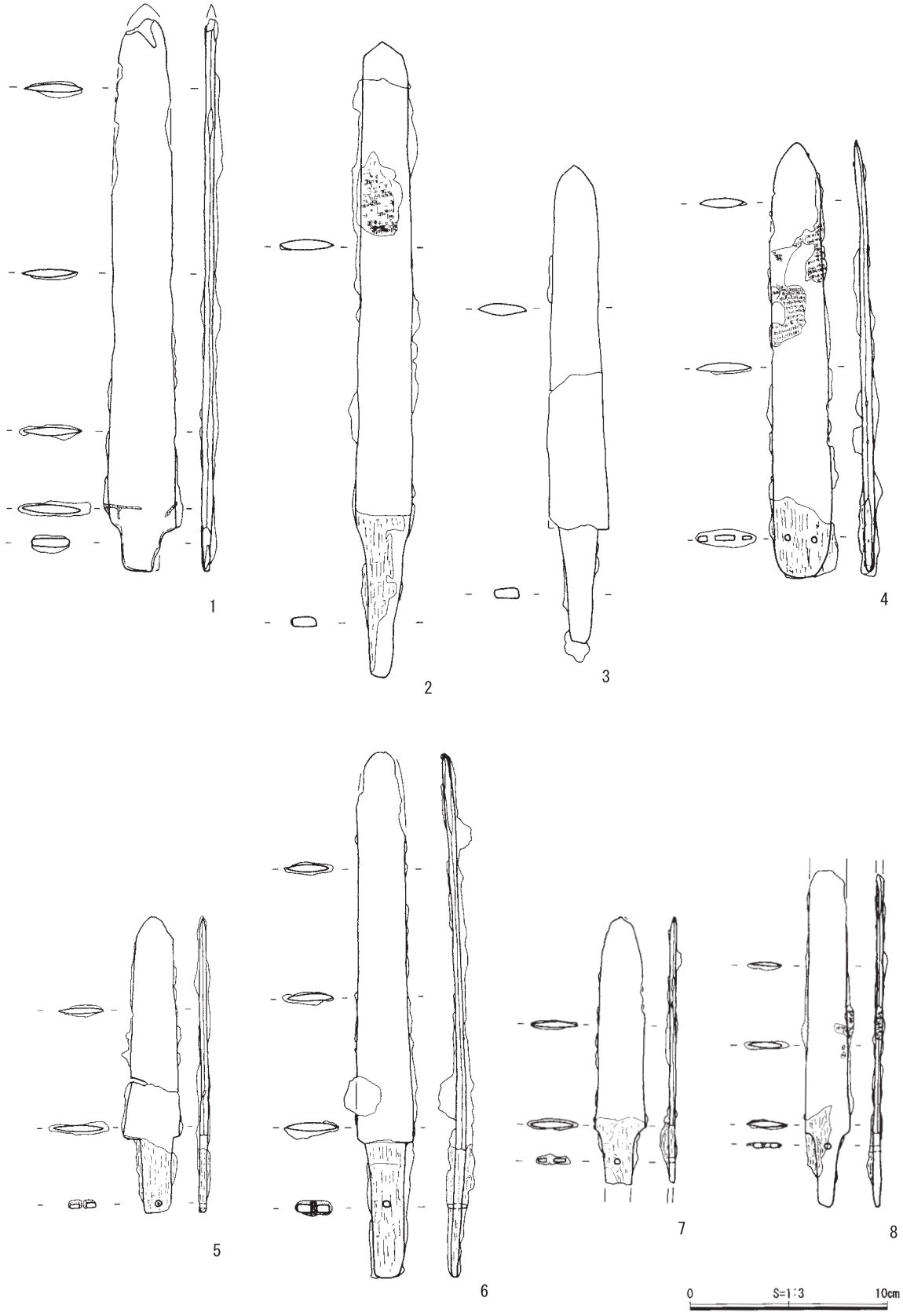
ものが多い。刃部の反りに着目した田中謙の分類（田中2008）では、８がやや直線的な刃部をもつC１類になりそうだが、他は概ねB類にあたる。日本列島における出現期の銛は、刃部が反らないA類で、刃部と茎部の平面・断面形態が同一で刃部から茎部までが一体のものが多いが、東海地方では認められない。

③鉄鑿（第３図）

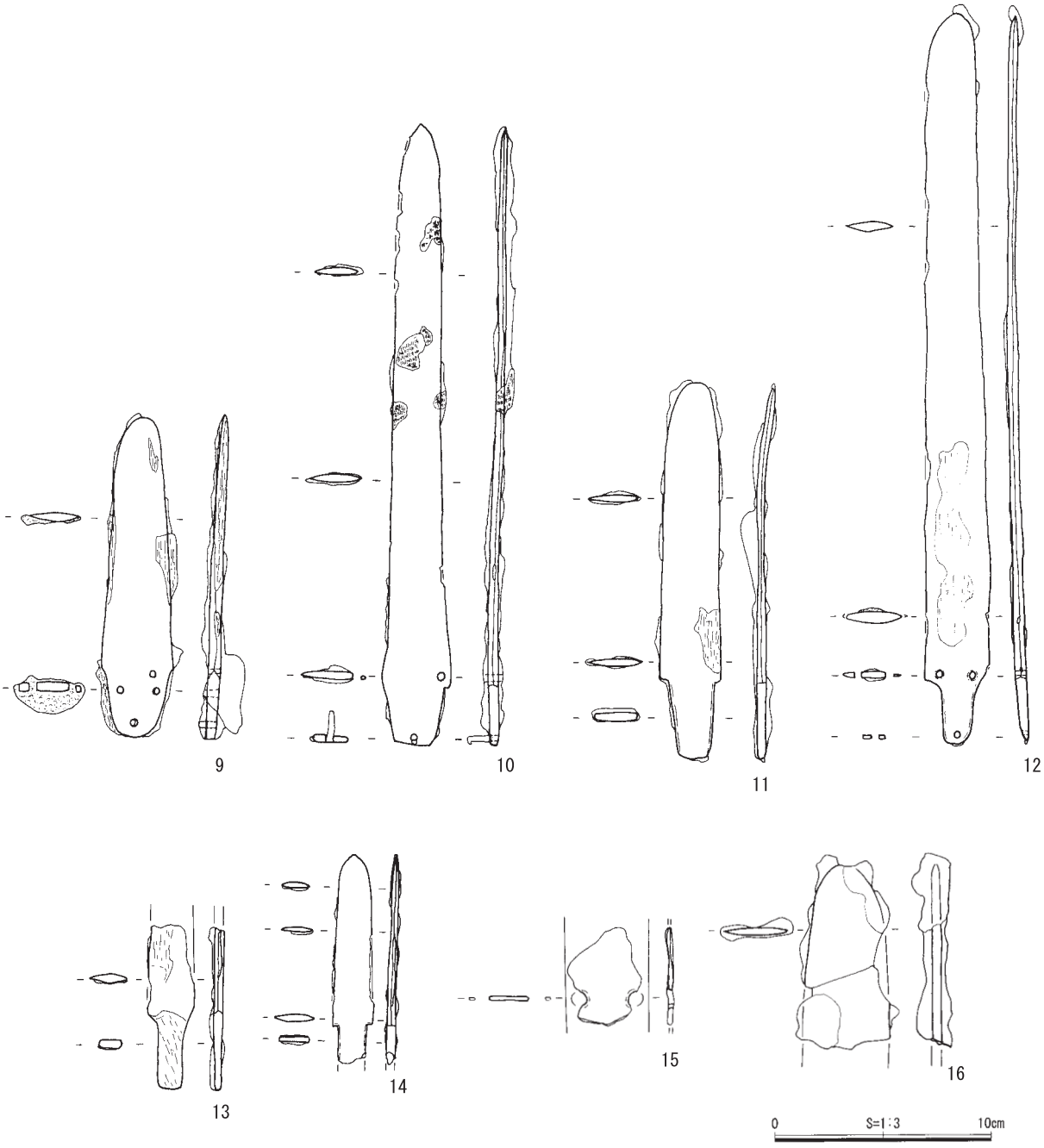
３点出土しているが、いずれも細身で厚さは0.5㎝前後である。幅も１㎝前後で細長く、鉄銛などと同様に木工細工用のものと思われる。２は木柄の痕跡が良好に遺存しており、刃部の長さが2.6㎝程であったことが分かる。

④鉄刀子（第４図）

１～４が身部から茎部にかけての形態が分かるもの、１～10が鋒のみ、11が茎部のみ、12が身部の破片である。７・12は身部幅が３㎝前後あり、鉄刀の一部である可能性も考えられる。１・３・４は無関だが、２は両関かつ直角に近い関部形態を呈し、茎部に目釘孔が認められる。４は茎部に木質付着が認められ、木製把が装着されていた可能性がある。



第７図　東海地方出土鉄剣の諸例①
１．中島西原田　２・３．倉見原３号　４．原新田　５．竹之内原１号　６．新豊院山３号　７・８．梵天

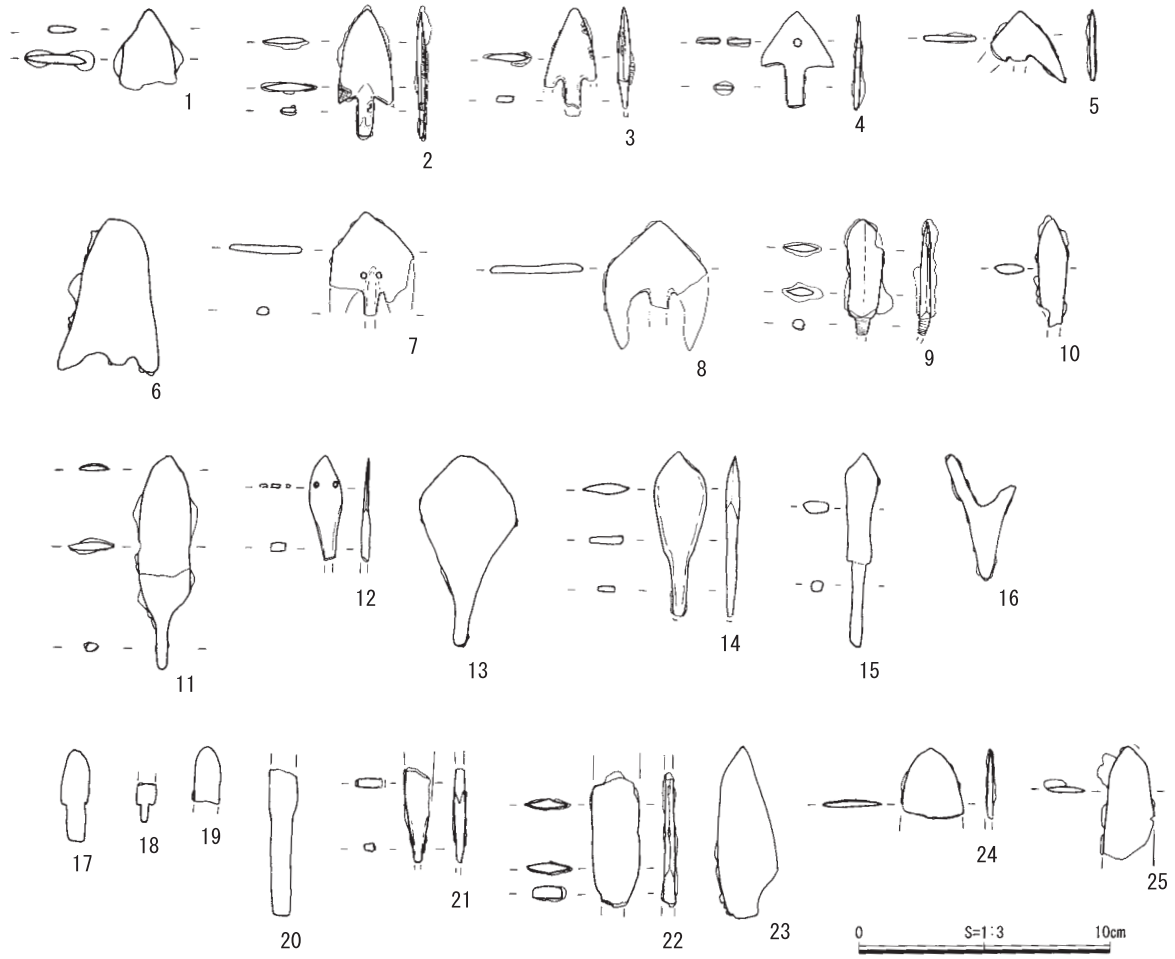


第８図　東海地方出土鉄剣の諸例②
９～11．文殊堂　12．伊瀬粟地　13．稲ヶ谷　14．矢畑　15・16．白浜

⑤鉄鎌（第５図）

１～６が穂首刈りあるいは根刈り用の刈鎌、７・８が穂摘み用の摘鎌である。６は刈鎌の刃部破片と思われる。１～５の刈鎌はいずれも刃部長15㎝前後の小型品で、刃部がやや不明瞭な１以外全て直刃鎌である。着柄のための基部の形態は、刃部を下にして刃先部を左側に、基部を右側に見た場合、基部が手前側に折り返される点で全事例共通している。寺家前遺跡出土例は、実際に木柄が着柄された状態で出土した稀有な事例であり、着柄された鎌の姿が分かる貴重な資料である。寺家前遺跡例も基部の作りは１～５と同様であり、木柄に差し込まれた刃部は、基部の折り返しによって脱落しないよう固定されていたようである。刃部の形態は使い減りによる影響を受けているため、判然としない部分もあるが、曲刃に近い。

弥生時代の刈鎌の基本的な変遷過程は、大型鎌が小型鎌に、曲刃鎌が直刃鎌に先行する（松井1993）。寺家前遺跡



第９図　東海地方出土鉄鏃の諸例
１.ニタ子　２・９．新豊院山３号　３．文殊堂　４・５・22．南山畑　６・23．瑞穂　７・８．南谷
10．平沢　11・24．三王山　12・25．山奥　13．小黒　14．矢畑　15・17～20．矢崎　16．山木　21．菖蒲ヶ谷

例を含め、刈鎌は全て弥生時代後期以降の所産と考えられ、形態は小型直刃鎌とされるものがほとんどである。ただし、弥生時代中期後葉には既に東海地方に鉄鎌が伝わっていた証拠を示す資料として、静岡県静岡市駿河区の有東遺跡出土木製刈鎌の存在があげられる（平野編1983）。木製刈鎌は、柄と刃部全てが木で作られており、柄と刃部を組み合わせて、刃部上方に楔を差し込んで固定する構造となっている。木柄に装着された鉄刈鎌を精巧に再現したものと思われる。木製刈鎌の刃部長は30㎝を超える大型直刃であり、小型直刃鎌の鉄刈鎌に先行して、弥生時代中期段階には大型直刃鎌が東海地方に伝えられていた可能性が示唆される。

穂摘み具としての摘鎌は、石庖丁同様の使用が想定され、法量と折り返しの有無などによって分類がなされている（川越1977）。７は左右両端を折り返すが、８には折り返しの痕跡が認められない。木柄への装着方法が異なっていた可能性がある。

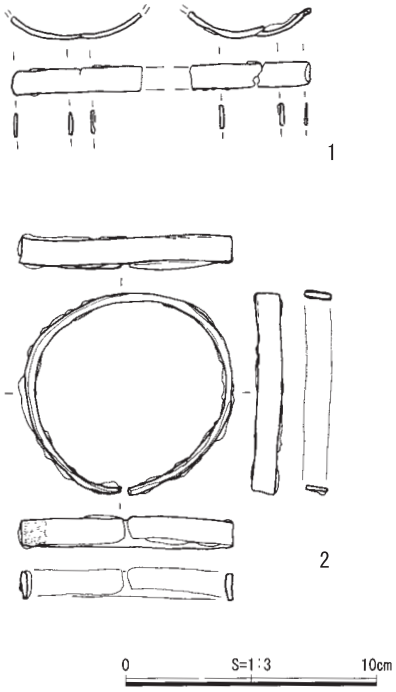
⑥鉄釣針（第６図）

５点出土しており、先端付近の厚さはいずれも0.2㎝程度と、非常に細く作られる。ヤス・銛・アワビオコシといった他の漁撈具の鉄器化が認められない点は、漁撈活動の中で釣り魚漁の比重が大きかったことと、少量の鉄素材によって製作が可能であったためと考えられている。

⑦鉄剣（第７・８図）

17点出土しているが、確認できたものの中で身部長35㎝を超えるような長剣は認められず、いずれも短剣である。２・３・６などの数例を除き、ほとんどが茎部長６㎝未満の短茎剣であり、全体の中での短茎短剣の占める割合が高いと言える。

茎部に木製把の痕跡をもつもの（２・４・５・６・７・



第10図　東海地方出土鉄釧の諸例
１．鷹ノ道　２．峯山

８）と鹿角製把の痕跡をもつもの（９）が認められる。４・９・10・12は刃関双孔鉄剣である。13・14はミニチュア鉄剣である（杉山2009a）。15は刃関双孔鉄剣の関部の一部、16は鋒の一部と思われる。

⑧鉄鏃（第９図）

53点出土しているが、確認できたもののほとんどが有茎式である。以下、大村直の分類（大村1983）をもとに概観する。１は確認できたものの中では唯一の無茎式で、無茎三角形式のいずれかに該当すると思われる。２～８は有茎腸抉三角形式にあたる。４は身部中心に単孔が穿たれる。７は双孔が穿たれるが、これは矢柄を根挟みで固定するためのものと思われる。９～12は柳葉式にあたり、12は先端付近に双孔が穿たれる。13・14は圭頭斧箭式にあたる。15は定角式に、16は雁又式に似た平面形態をしているが、詳細は不明である。17～25は破片または正確な形状が分からないため形式不明としたものであるが、いずれも柳葉式あるいは圭頭斧箭式に該当する可能性が高いと思われる。全体として有茎腸抉三角形式と柳葉式の出土が目立つ。

⑨鉄釧（第10図）

２点とも単環状鉄釧である。単環状鉄釧に関しては、土屋了介によって研究が進められている（土屋2009）。１と２は、断面長方形である点や環体幅の広さなどで共通点をもつものの、端部折り返しの有無や長さ、縦断面の形状などでは差異が認められる。形態が整っている１は端部にも折り返しが認められる。対して、２は形態に歪みが認められ、端部も処理が施されていない。こうした差異は、製作技術の水準や製作工程の違いによるものと推定される。

⑩その他（第11図）

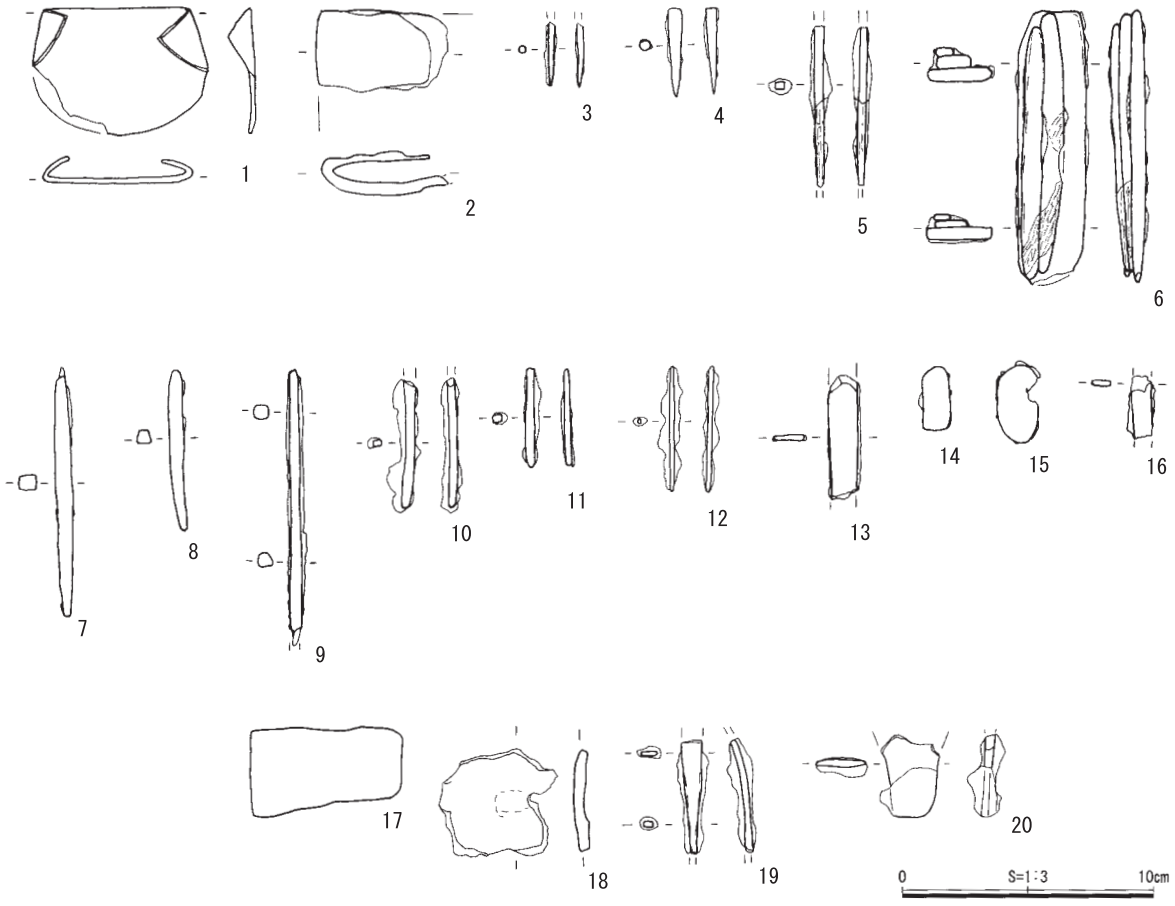
従来、いわゆる「不明鉄器」「棒状鉄器」「鉄片」とされてきた一群である。１・２は折り返し部の形状から、農具としての鉄鋤鍬先の可能性が考えられるものである。

村上恭通は従来認知されていなかった器種として、鉄錐・袋状鑿・耳かき状鉄器・船底状鉄器といった小型加工具を新たに見出した（村上2007）。３～５も穿孔具としての鉄錐と考えられるものである。鉄錐は玉作用の特殊な工具として認識される場合が多いが、住居址や鍛冶遺構の埋土からの出土も認められるという。鉄錐は鉄鏃製作などの鏨切りの際に生成される副産物が転用されたものと考えられているが、今のところ東海地方では鉄鏨の出土は認められていない。

６は３点の鉄器が錆着して出土したものである。３点ともほぼ完形であり、１点の板状鉄斧と２点の鉄鑿がくっついたものではないかと思われる。７～12は用途不明の棒状鉄器であるが、10～12の白浜遺跡出土例は、付近から鉄釣針が４点出土していることや、その細長い形状から、鉄釣針の未製品の可能性も考えられる。13～20はいずれも用途不明の鉄片で、何らかの製品の一部かもしれない。

４　東海地方出土鉄器の特徴

東海地方の鉄器の出現は、西通北遺跡出土例や朝日遺跡出土例、そして有東遺跡出土の木製刈鎌の存在を評価するのであれば、弥生時代中期中葉～後葉頃に工具と農具から受容されたことになる。ただし、この段階での鉄器の出土は２点に限られ、東海地方における鉄器受容開始を示唆させる程度である。一定量の鉄器の出土が認められ始めるのは、弥生時代後期以降のことであり、鉄器の器種も農工具に限定されず、多様な形態のものが認められ始める。特に、中期では１点も出土していなかった武器の出土が目立つようになる。弥生時代終末期には南山畑遺跡で鍛冶遺構が認められており、小規模ながら東海地方で鍛冶による鉄器製作がおこなわれ始めていたことが窺える。



第11図　東海地方出土不明鉄器の諸例
１．東原　２．元屋敷　３．菖蒲ヶ谷　４・６．祝田　５．山奥　７・８．山木
９・13．雌鹿塚　10～12・19・20．白浜　14・15．登呂　16．南山畑　17．則武向　18．金塚

東海地方において鉄器が多器種かつ一定量出土し始めるのは、弥生時代後期段階からである。しかし、隣接する南関東地方では、器種としては農工具が主体であるものの武器を含む鉄器が、弥生時代中期後葉の宮ノ台式期には一定量出土している（安藤1997）。東海地方の鉄器の受容とその後の普及が、南関東地方よりもやや遅れる点については、周辺地域の動向も踏まえて、今後検討が必要となるだろう。

おわりに

本稿では、集成した鉄器を不明鉄器も含め、可能な限り形状や用途を類推し、積極的に評価した。今回、実見することによって器種が判明した不明鉄器も存在した。用途・性格不明の鉄片の中には、鉄器の未製品や鉄器製作時に生み出される鉄素材の裁断片などが含まれている可能性もあり、軽んじることはできない。そういう意味でも、今後は性格不明の鉄器片にも注意を払っていく必要があるのではないかと思う。

本稿は、東海地方における鉄器化を考える準備作業として、弥生鉄器の集成と概観に終始した。今後は弥生石器の消長も踏まえ、検討を進めていくことを課題としたい。

本稿執筆のための資料の実見・実測に際しては、下記の方々・機関に便宜をはかって頂いた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

（敬称略、順不同）

岩崎しのぶ、清水政宏、杉浦裕幸、高橋健太郎、平賀大蔵、藤川俊、丸杉俊一郎、森泰通。

静岡県教育委員会、豊田市教育委員会、美濃加茂市民ミュージアム、四日市市教育委員会、海の博物館。

註

1　本稿における「東海地方」とは、日本列島本州中央部の内、太平洋側の地方を指し、現在の行政区分での愛知・岐阜・三重・静岡の４県域にあたる。

2　愛知県名古屋市熱田区の高蔵遺跡から弥生時代前期に帰属される鉄製刀子が出土したと概要報告書中で報告されている（名古屋市教育委員会1982）が、本報告では明確な弥生時代前期の金属製品は出土していないと報告されている（山田ほか編2003）。本報告に則り、本稿では高蔵遺跡出土資料は検討の対象に含めていない。

引用・参考文献

天石夏実　2000 「鷹ノ道遺跡（第６次）」『ふちゅ～る』№8　静岡市教育委員会

浅野毅　1988 「小黒遺跡」『静岡・清水平野の弥生時代―新出土品にみる農耕生活―』 静岡市立登呂博物館

安藤広道　1997 「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館研究紀要』第２号　横浜市歴史博物館

梅島満　1978 「駿河湾を中心とする土師器の研究」『駿河』第31号　駿河郷土史研究会

大村直　1983 「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第３号　考古学研究会

小栗鐵次郎　1932 「銅鏃鐵鏃を共存した名古屋市瑞穂町東牧の彌生式遺蹟」『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十　愛知縣

小栗鐵次郎　1933 「名古屋市西區則武町向貝塚」『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十一　愛知縣

小野真一　1957 『静岡県東部古代文化総覧』 蘭契社書店

小野真一　1971 「駿河矢崎遺跡調査略報」『駿豆の遺跡研究』（１） 沼津女子高等学校郷土研究部

川越哲志　1977 「弥生時代の鉄製収穫具について」『考古論集―慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集―』松崎寿和先生退官記念事業会

川越哲志　1993 「弥生時代の鉄斧と鉄釿」『考古論集―潮見浩先生退官記念論文集―』 潮見浩先生退官記念事業会

佐藤達雄　1995 「運ばれてきた鉄斧―清水市長崎遺跡出土鉄斧の考古学的検討―」『設立10周年記念論文集』 ㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

下條信行編　1998 『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』 愛媛大学

澄田正一編　1967 『新編 一宮市史』資料編二　一宮市

杉山和徳　2009a 「ミニチュア鉄剣に関する一考察」『研究紀要』第15号　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

杉山和徳　2009b 「東駿河の弥生時代の始まり」『平成21年度遺跡調査報告会 静岡の原像を探る』 ㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所・静岡県教育委員会

杉山和徳　2010 「西通北遺跡―弥生時代中期中葉の環濠の調査―」『月刊考古学ジャーナル』№600　ニューサイエンス社

田中謙　2008 「弥生時代における鉇の機能分化とその意義」『地域・文化の考古学―下條信行先生退任記念論文集―』 下條信行先生退任記念事業会

土屋了介　2009 「弥生時代単環状鉄釧の型式学的研究―断面長方形・断面二等辺三角形にみる系譜の違い―」『東海史学』第43号　東海大学史学会

中嶋郁夫　1992 「弥生時代鉄製品一覧」『静岡県史』資料編３ 考古三　静岡県

平野吾郎　1987 「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の出土状態について」『研究紀要』Ⅱ　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

松井一明　1997 「東海地方における鉄器の普及と展開」『第４回鉄器文化研究集会 東日本における鉄器文化の受容と展開』 鉄器文化研究集会

松井和幸　1982 「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐって」『考古学雑誌』第68巻第２号　日本考古学会

松井和幸　1993 「鉄鎌について」『考古論集―潮見浩先生退官記念論文集―』 潮見浩先生退官記念事業会

村山恭通　1992 「中九州における弥生時代鉄器の地域性」『考古学雑誌』第77巻第３号　日本考古学会

村上恭通　1998 『倭人と鉄の考古学』 青木書店

村上恭通　2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』 青木書店

山田鉱一　1980 「瑞穂遺跡―1951・52・54年度発掘調査報告―」『人類学博物館紀要』第２号　南山大学人類学博物館

山田隆一　1988 「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」『網干善教先生華甲記念考古學論集』 網干善教先生華甲記念会

報告書

足立順司ほか編　1995 『長崎遺跡』Ⅳ　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

天野博之編　1999 『南山畑遺跡』 豊田市教育委員会

石川治夫編　1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　沼津市教育委員会

石黒立人ほか編　1994 『朝日遺跡』Ⅴ　㈶愛知県埋蔵文化財センター

伊藤美鈴　1996 「峯山台状墓・崇信寺古墳群」『静岡県森町飯田の遺跡』 森町教育委員会

岩野見司ほか編　1965 『川路萩平（C地点）遺跡・大宮八剣遺跡』 新城市教育委員会

小野真一編　1970 『目黒身―弥生・古墳時代集落址の調査―』 沼津考古学研究所

小野真一ほか編　1968 『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財調査報告書』 静岡県教育委員会・日本道路公団

金子智子編　2004 『城ノ谷遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター

川崎志乃ほか編　2009 『上箕田遺跡（第３次）・上箕田城跡、上原遺跡、尾野山城跡、打越城発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター

木村弘之編　1992 『竹之内１号墓遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会

蔵本俊明編　2001 『菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群』 ㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

齊藤基生・可児光生・磯谷祐子編　1994 『伊瀬粟地遺跡発掘調査報告書』 美濃加茂市教育委員会

佐口節司編　2003 『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工

事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
佐口節司ほか編　2006 『新豊院山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 磐田市教育委員会
柴田睦編　1993 『椿野遺跡』 ㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
渋谷昌彦・坂巻隆一・足立順司編　1985 『田ノ谷遺跡発掘調査報告書』 島田市教育委員会
清水政宏編　2003・2004 『山奥遺跡』Ⅰ・Ⅱ　四日市市教育委員会
鈴木光一編　1994 『祝田遺跡』 ㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
田中秀和編　1998 『大城遺跡発掘調査報告書』 安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会
谷本鋭次編　1970 『高松弥生墳墓発掘調査報告』 津市教育委員会
田村隆太郎編　2006 『森町円田丘陵の遺跡』 ㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
中野宥編　1989 『登呂遺跡出土資料目録』写真編　登呂遺跡基礎資料４　静岡市立登呂博物館
中村文哉編　1994 『欠山遺跡』 小坂井町教育委員会
萩本勝ほか編　1990 『白浜遺跡発掘調査報告』 本浦遺跡群調査委員会
橋本敬之編　1994 『御殿川流域遺跡群』Ⅱ　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
平野和男編　1971 『ひらさわ 平沢遺跡発掘調査報告書』 佐久間町教育委員会
平野吾郎編　1983 『有東遺跡』Ⅰ下　静岡県教育委員会
平野吾郎・山田成洋・伊藤律子編　1991・1992 『川合遺跡遺物編』２　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
穂積裕昌・小菅文裕編　1995 『一般国道23号中勢道路（６工区）建設事業に伴う南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
前田清彦ほか編　1989 『郷中・雨谷』 豊川市教育委員会
松井一明編　1983 『浜北市東原遺跡B地点』(Ⅰ)　浜北市教育委員会
松井一明ほか編　2004 『愛野向山Ⅱ遺跡』 袋井市教育委員会
丸杉俊一郎・平塚智久・大谷宏治編　2008 『矢畑遺跡』 ㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
水野裕之ほか編　1999 『三王山遺跡（第１～５次)』 名古屋市教育委員会
宮腰健司編　1992 『朝日遺跡』Ⅲ　㈶愛知県埋蔵文化財センター
森泰通ほか編　2001 『神明遺跡』Ⅱ　豊田市教育委員会
森川幸雄ほか編　2002 『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設事業に伴う金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
八木勝行・磯部武男編　1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　藤枝市土地開発公社・藤枝市教育委員会
八幡一郎ほか編　1969 『山木遺跡―第二次調査概報―』 韮山町教育委員会
山田鉱一ほか編　2003 『高蔵遺跡（第１次)』 名古屋市教育委員会
渡辺博人編　1999 『蘇原東原遺跡群発掘調査報告書』 各務原市埋蔵文化財調査センター
名古屋市教育委員会　1982 『高蔵遺跡発掘調査概要報告書』

図版出典

表　筆者が作成した。
第１図　１～３・６～11は遺物の保管機関において撮影した写真と遺跡の報告書図面をもとに筆者が作成した。４・５・12・13・15～17は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。14は遺物の保管機関において筆者が作成した。
第２図　１～７・12・17は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。８～11・15・16は遺物の保管機関において撮影した写真と遺跡の報告書図面をもとに筆者が作成した。13・14・18は遺物の保管機関において筆者が作成した。
第３図　１・３は遺物の保管機関において筆者が作成した。２は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。
第４図　１・４～６・10・11は遺物の保管機関において筆者が作成した。２・３・７～９・12は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。
第５図　１・６～８は遺物の保管機関において筆者が作成した。２～５は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。
第６図　１は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。２～５は遺物の保管機関において筆者が作成した。
第７図　１・５～８は遺物の保管機関において筆者が作成した。２～４は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。
第８図　９～11・13～16は遺物の保管機関において筆者が作成した。12は遺物の保管機関において撮影した写真と遺跡の報告書図面をもとに筆者が作成した。
第９図　１・２・６～11・13・15～20・24・25は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。３～５・12・14・21～23は遺物の保管機関において筆者が作成した。
第10図　土屋2009aのレイアウトを一部改変して再トレースした。
第11図　１・２・７～９・13・14・16～19は遺跡の報告書図面のレイアウトを一部改変して再トレースした。３～６・10～12・15・20は遺物の保管機関において筆者が作成した。

Emergence of Iron Implements in Tokai Region

Kazunori SUGIYAMA

Summary: In this paper I examine the history of iron use in Tokai region by compiling excavated iron materials. We can trace back the first appearance of iron implements of Tokai region to the mid- Yayoi period, still its variety and quantity were not yet sufficient before the later Yayoi period. By adopting data of features excavated in Aichi prefecture and giving a positive estimate to the iron objects having classified into “unknown”, I recognize the possibility that producing of iron implements with a chisel cutter and processing for reuse of iron products can be started in the final Yayoi period.

Key words: Yayoi period, Tokai region, iron implements, blacksmith features, making of iron implements, re-processing, diversion